

ごちそうさまでした

上越市立三和中学校

二年

小林 ニハヤシ

晃太 コウタ

僕は、ごはんをたくさん食べる方ではあり

ません。それよりも、よくごはんをのこして

いる方でした。その度に父から、

最後の一粒まで、ちやんと食べなさい。そ

うでないよ、お前には何もくおせてやらない

ぞい。

そうやってしかられて、ごはんを食べていま

した。

そんな自分を変えたのが、小学校五年生の

時。最初から最後まで、米づくりをした時の

こと。僕は、母の実家で米づくりを手伝いま

す。ですから、米づくりは大変だということ

は、よく分かっていました。だから、

うまくできるかなあ。

という不安と、

楽しそうに早くやりたかった。

という期待が入り交じっていました。

五月、田植えをしました。初めて、裸足で

田んぼに入りました。泥が冷たくて、ひや

し。としました。何度も泥に足をとられて転

んだり、泥だらけにな。て友達と笑い合っ

り、大変だ。たけれど、とても楽しかったで

す。

八月、一週間に一度、田んぼに行つて観察

しました。少し見ない間に、稲はどんどん

大きくなつていきました。僕達が育てた稲が成

長していくのは、とても嬉しいものでした。

十月、稲刈りをしました。とにかく、腰が

痛かったです。前傾姿勢で、稲を一本も残さ

ずに、すべて刈らないといけません。そのう

え、首やうでがものすごくちくちくして、作

業が進みませんでした。刈り終わったら、束

にして結びました。ウラで結んだので、すぐ

切れてしまったり、難しかったです。

その数日後、脱穀、精米をしました。精米

したお米は、白く輝いていました。たくさん

収穫できて嬉しか。たです。何よりも、僕達

が一生懸命つくったお米をこれから食べても

らえると思うと、わくわくがとまりませんで  
した。

十月下旬、みんなでお米を販売する日がや  
てきました。この日のために、たくさん準

備しました。そして、やってきた開店時間。

お客さんは、たくさんいました。教えきれな  
いくらい。

「いらしゃいませ」

「一つ、いかがですか」

一つ、二つ。袋は飛ぶように売れていきます。

一時間ほどで、五十袋が完売。全員、歓声を

あげ喜びました。

「全部売れて、よかった」

嬉しさに満ちて家に帰ると、母が、僕達が販

売したお米を買ってきていました。お米をこ

いで、炊飯器にセット。ピーンと音がして、

炊飯器のふたをあけると、お米のおいしそう  
で香ばしいにおいがします。

その日は、家族皆で僕達が作ったお米を食  
べました。おいしか。たので、僕は、おがあ

りもしました。でも、となりで弟はご飯を残していました。

「何で、食べないんだよ。」  
心の中でつぶやいた時。はっ、としました。

「そうか。お父さんが、<sup>日</sup>最後まで、ちゃんと食べなさい。」  
と言うのは、作ってくれた人に感謝の意味を込める。そういうことだったんだ。

今では、僕はご飯を全部いただいています。給食だつて残していません。農家の皆さん、

家族、そして生命に感謝して言います。  
「ごちそうさまでした。」

指導者 西脇明美先生